

經濟論叢

第六十一卷 第三號

國際價值論について……………松 井 清

貨幣の流通速度の概念に就て……………岩 根 達 雄

片山潜と明治労働運動史……………岸 本 英 太 郎

高橋幸八郎氏「近代社會成立史論」……………河 野 健 二

京都帝國大學經濟學會

高橋幸八郎氏「近代社會成立史論」

河野健二

近代社會がヨーロッパにおいて、いかにして成立してきたかを質ぬることは、今日のわが國の實踐にとつてこの上もなく切實な問題であることを何人も疑ふものはないであらう。本書はまさにこの問題に答へるべく刊行されたものであつて、その限りに西洋史家のみではなく、一般知識層にとつても興味と關心の的たることを失はない好著といふことが出来る。

近代社會の成立を論ずるにさいして、何故とくにヨーロッパ、それも西ヨーロッパの社會が採り上げられるかについては、著者の言によればそれが「世界史の發展行程において『純粹に古典的な』段階構成を示す」(序言)からであり、したがつて西ヨーロッパの歴史は單に特殊ヨーロッパ的なものではなくして、直ちにそれが世界史の近代發展につながるものであり、その意味よりして西ヨーロッパ史が世界的意義をもつからに他ならない。したがつて本書において著者の意圖されるところは、著者みづからの言葉によれば「先づ『西ヨーロッパの近代世界構造成立への鍵を見出すこと』といふことになる。しかし後に明かになるやうに、西ヨーロッパのうちでも特にフランスに著者の關心が

注がれてゐるのであるが、しかしその場合にも單にフランスをそれ自體として、といふのは他の諸國と切り離して論ずるのではなくして、西ヨーロッパのフランス型として常に西ヨーロッパの構造との關聯が問題にされてゐる點において、著者の立言が首肯されてよいわけである。

さて著者はその意圖をいかなる方法上の立場から實現せんとするのであらうか。著者は近代歴史學の遺産ともいふべき客觀主義——史料による實證を重んずること、政治的立場を混へないこと——を「當然の前提」として認めながらも、しかもこの客觀主義のもつ「限界」を明白に指摘される。その理由は、史料はいかにそれが客觀的なものであつても、ひつきやうそれは歴史認識にとつて素材としての役目しかもたないものであつて、素材が直ちに歴史になるのでは在り得ない。歴史は言ふまでもなく歴史家によつて書かれるのであるが、その場合歴史家の歴史認識の仕方が、全く純粹に客觀的になされるといふことは、その歴史家自身が特定の歴史的な社會に生きてゐる以上不可能であると言はねばならない。さうすると歴史を客觀的に科

學的に構成することは、近代歴史學の方法をもつてしては達成することが出来ないといふことになる。これが著者の指摘される「限界」の意味であらうと思はれる。

それでは著者のこれに對する立場はどうであらうか。この點、著者の表現はかなり難解であつて眞意を正しく傳へ得ないことを恐れるが、結局、歴史は歴史家が政治的立場から遠ざかることによつてではなくして、反對に自らの據つて立つ現實ものに足場をおいて、現在の立場から書かれるときに始めて科學的となり得ると言はれるごとくである。勿論この場合の現實なるものは永遠的な固定したものではなく、それ自體が一つの歴史的社会なのであつて、そのことを認識した上で歴史認識の基準を社會的現實のうちにとることが要請されてゐる。「歴史は各世代によつて書き改められる」と言はれ、「歴史學は、それ故、科學的であればあるほど益々より深く政治的のものとなる」と言はれてゐるのは、以上のことを意味されるものと思ふが、しかし歴史(學)的認識の主體がいかなる場合にも歴史的社会的に制約されてゐること、それを離れて科學的な歴史認識は成立し得ないことは著者ととも認めるとしても、その故にすべての政治的立場が科學的歴史を成立せしめるとは言へないであらう。恐らく著者も政治的立場を決して一つに止まり得ないこと、政治的立場をとることが直ちにその歴史家の歴史構成を科學的たらしめるものではないことを認められてゐること

あらうと推測されるが、それならば科學としての歴史學を眞に成り立たしめるとき政治的立場とは一體いかなるものであらうか、又いかなるものでなければならぬか。この點についての著者の見解は必らずしも明かにされてゐるとは言ひ難いが、たゞ著者の立場は歴史を生産體系、ある場合には生産力の歴史として把握すると同時にそこに働く主體的契機を重視せんとするものであることだけは誤りなく言ひ得ると思はれる。

さて以上のやうな意圖と方法とのもとに究明される近代世界成立過程の分析は、日本そのものゝ實踐的課題にとつていかなる意義をもつであらうか。ヨーロッパの近代が世界史的に古典的な構成をもつ以上、その究明によつて日本社會との對比を行ふことが出来るし、更に世界史の一般法則と比較しての日本社會の特殊性を明にしもつて世界史の發展方向に則つての日本の再建が可能になることも亦、著者の教へられる通りであらう。しかし日本社會の特殊性について著者の示唆しておられるところには、かなり特異なものがある。著者によれば特殊日本的な型制は「純粹に封建的な」ものゝ存続でもなければ「アジア的生產様式」の結果でもなくして、人間の精神が未だなほ自然性のうちに埋没してゐるやうな、原始宗教の段階に在るものとしてヘーゲルによつて説かれてゐる「東洋世界」の構造原理がみづから貫徹することによつて形成されてゐるものであると主張され、そこには歴史的發展を媒介する「主體的契機」が缺けて

あることを指摘されるのである。日本社會の特質を、封建性どころではなく古代以前にまで溯つて求めようとする試みが一體なことを意味するかは問はないとして、こゝでは單に著者獨自のきはめて特徴的な見解の一端が示されてゐることだけを紹介することにせよ。

「序言」の紹介が思はず長くなつたが、續いて本論に入らう。本論は五篇から成り、いづれも元來は獨立の論文として書かれたものである。「ヨーロッパ資本主義の國民的類型」と題する第一篇と、最後篇たる「市民革命の構造展望試論」とは著者によれば一の概論的歴史記述の試みであるとされてゐるが、前者はヨーロッパ資本主義のもとにおいてフランス資本主義の占める位置とその構造的性質を確定するための言はゞ焦點を合はせる働きをするものであり、後者はフランスそのもの内部においてアンシャン・レジームを通じて生まれてくる歴史の推進力が革命において如何に現はれるかを展望したもので、いはゞ未來に向つて視線を投げかけたものと言へよう。これに對して第二、三、四篇が著者の具體的な歴史研究の成果をなすものであり、それぞれ力の籠つたすぐれた勞作であつて、著者の獨自の業績はこの三論文によつて示される。以下、本書の各篇に互つて紹介することは却つて讀者を煩はすであらうから、最も重要と思はれる第三篇「所謂農奴解放について」に主眼をおきつゝ、本書の要點と思はれる主旨だけを紹介しよう。

ひとくちに資本主義といつても、それに種々の類型があり變異があることは、すでに幾多の先學によつて指摘されてをり、近くはまた本書の著者が推稱して止まない大塚久雄氏によつても説かれてゐるが、著者はそのさい大塚氏の見解を全面的に承認されつゝ、正常的・古典的構成をもつ第一の型たるイギリス型の特質を、封建的土地所有が勞働地代の貨幣地代への轉化に伴つていち早く解體して、獨立自營農民層ヨーロッパが廣く成立したこと、そしてそのヨーロッパ層が産業資本家層を産みおとしつゝ急速に分解し消滅することによつてイギリス資本主義が形成されたことに求められる。第二の型たるプロシヤ型においては農民は自由にして獨立の自營農民として解放されることななく、逆に農奴解放によつて領主の地位が強化されて地主による資本主義經營すなはちエンケル體制の方向が採られてくる。以上は一先づこれくらいとして著者はこれらに對する第三の型としてフランス型を主張される。フランス型はフランス革命によつて終極的に形成されたものであつて、その特質は先づ封建的諸條件から農民が完全に解放されて土地を所有する獨立自營農民層がひろく成立したことに求められるが、このことは資本主義的發展のための前提條件を作り出したはしたけれど、而もこの獨立小農民層が完全に固定化したことは却つて資本主義的發展を緩慢ならしめ不完全に終らせることとなるといふ性格を受取る。フランス農民層のこの二重性格、これがフランス型を特色

づけるものであるとされる。

それでは何故、どのやうにしてかゝるフランス型が形成されたのであらうか。著者の努力はかくしてフランス型の分析と説明に集中される。右によつても明かなやうに資本主義の國民類型を決める要因は一般的には生産體系の構造であり窮極的には封建的土地所有關係と農奴制度がどのやうに變化したかに求められてゐるが、ところで封建的土地所有が歴史上最初の大きな變化を示したのは、周知のやうに農奴解放によつてであつた。だからその内容を追求することが、國民的類型の分析にとつて一歩前進を意味することになるわけである。

封建經濟のいはゆる古典的な姿は、領主の直營地と農民の保有地との二つを包含する典型的な莊園經濟であり、この場合、領主と農民との關係は領主本領において農民の行ふ賦役義務すなはち勞働地代によつて結びつけられる。かうした古典的莊園は封建社會に遍く存在してゐたのではなく、最初からそれを缺く地域もあつたけれどもいづれにせよ勞働地代による收取關係は時代の經過と經濟的發展の結果として、直營地が解體されるとともに消滅して生産物をもつてする地代形態に轉化され始める。他方、商品・貨幣經濟の發展とともに次第にその渦のなかに巻きこまれつゝある領主は貨幣入手の必要からして農民の負擔する人格上・身分上の諸義務を彼等に買渡すことを企てはじめる。勿論、本來の地代はそのまゝにしておくが、人格的懸屬

關係に由來する領主の權利を買取らしめたのである。フランスではかうした解放がほゞ十三世紀に始まり十六世紀まで續いたが、これによつて幸ひにも買取ることの出來た農民は人格的には自由となつたが、その場合にも封建地代そのものは負擔したし、買取ることの出來なかつた貧しい農民にとつては單に税金が加重されたといふ結果だけを齎したに過ぎない。

さらに重要な變化は封建地代そのものによつても起つた。著者にしたがへば地代は十三世紀以來經過的に貨幣地代に轉化しつゝあつたが、イギリスにおいては生産物地代をとり越えて直ちに貨幣地代が全面的に成立し、ドイツにおいては賦役地代が逆に強化されたのに對して、フランスでは貨幣價値の下落によつて貨幣地代が引合はなくなるにつれて十六世紀以後十七・八世紀にかけて領主の側からする全面的な反動が起つて生産物地代への復歸とその固定が行はれたと言はれる。これが謂はゆるアンシャン・レジームにおける領主制的反動と呼ばれるものであつて、極めて重要な、その故に問題點を含む考へ方である。

以上の二つの經過を綜合すると、十八世紀のフランス農民の姿が浮き上つてくる。すなはち解放によつて人格的自由を獲得した農民は同時に世襲的に土地を保有することによつて實質上の土地所有農民にまで上昇する。が他方、地代は純粹に封建的な生産物地代の形態をとつて封建的土地所有關係は依然として存續するばかりでなく却つて強化される。このうち後者はフラ

ンス革命によつて廢棄されるから、残るのは前者だけ即ち完全な獨立小農民の形成といふこととなり、これが第三の型たるフランス型を終極的に決定するわけである。勿論、かうした過程は決して順調に進行したのではなくして、農民的改革の方向に對して地主・商人の側よりする寡頭專制的改革の方向が強力に働いたのであるが、結局前者の農民的民主的方向が後者を壓倒し去るところに近代フランス社會の完き成立が見られると説かれる。この間の事情は第四、五篇において扱はれる。

以上、わたしの理解し得たかぎりで本書の紹介を試みた。事柄が複雑の上に著者の表現はかなり難解であつて果してよく眞意を盡し得たか否かを恐れるが、終りに若干のわたしの疑問を呈出して著者の教示を乞ひたいと思ふ。長くなるのでフランス歴史學界の業績に對する著者の見解について意見を述べるのは又の機會にゆづつて、こゝでは簡単に理論上の二、三の點のみに止めておく。その一つはアンシャン・レジーム下の謂はゆる自營農民層に關してであるが、もしも言はれるごとく彼等が革命前においてすでに事實上の土地所有農民であつたとするならばそのこと十六世紀以來の封建的反動とはいかに結びつくであらうか。その場合には例へばイギリスにおけるごとく封建的反動の餘地は存しなかつたと言はねばならぬのではなからうか。そしてもしも封建的反動が存したと見るならば、一般にフランス農業の生産力がそれだけ低く、農民の手許での蓄積を可能な

らしめるやうな富農層の形成が阻ばれたことにその原因を求めねばならぬのではなからうか。大塚氏流の生産力論の見地を承認するとするならば、イギリス型とフランス型との相違の基本點は先づ此處に置かれるべきではないであらうか。加ふるにわれわれは著者から革命前において生産物地代が支配的であることを學んだが、著者も言はれるごとく現物地代は「純粹に封建的」なものである以上、そこにたとひ萌芽形態にもせよ近代化の前提を求めることは出来なと思はれる。そして又さうした農民が主動力となつてフランス革命を農民革命たらしめたといふ風に推論することにも疑問を抱かざるを得ない。

封建社會が解體するといふことは同時にその基底をなす農民社會の分解が進行することであると考へられるが、フランス封建社會の解體と近代化にとつても農村の階級分化の觀點から之を見ることは是非とも必要であらう。著者も再三この問題に論及してをられるが、それがフランス型農村をどのやうに特色づけるかについては必らずしも充分明瞭にされたとは思はれない。農民層の分解がどの程度に如何に進行したか恐らくフランス革命の主動力の少くとも一つを決めるのではないかと私には考へられる。なほ農民層の分解にとつては商品・貨幣經濟の發展が不可欠の前提をなすことは言ふ迄もないが、著者は商業資本・市民的土地所有の發展をすべて前期性・封建性において見られるごとくであつて、もしさうであるならば資本主義への過

渡的段階たる商品經濟の段階がもつ意義を没却することになりはしないであらうか。思ふに封建制から資本主義への推轉は、とくにフランスでは商人・地主の僥越のもとにおける商品經濟的發展によつて可能となつたと見るべきであつて、著者のごとくそれらをすべて前期性・封建性で塗りつぶしてしまふならばフランス革命がブルジョア革命として達成されたことの意義は一體いかにして理解されるのであらうか。總じて資本主義をもつばら獨立小農民のみに歸着せしめようとする大塚氏流の見解は商品經濟の意義およびその産物をる原始的蓄積過程を無視するところの資本主義の理想化論に陥りはしないであらうか。とくにこの考へ方をそのままフランスに適用するならば、農民に關するかぎり、アンシン・レジームと革命との差違は、單に事實上の所有權が法的に確認されたといふにとどまり、フランス農業がその間にいかに發展し、農民層の分解がいかに進行し、領主と農民との關係がいかに變化したか、つまりは其處にいかなる歴史が存在したかといふ根本的な事柄が見失はれてしまふのではないであらうか。著者が絶對主義を單に封建的なものと考へ、重農主義理論を「反動體系」と規定されることも右の理由よりして私には理解し得ないところである。以上きはめて簡單に私自身の未熟な疑問を開陳したが、本書はこの方面に關する従來の研究の多くが全く問題性をもたない平板な事實の説明であるのに對して、明確な問題意識の下に豊富な資料を驅使し

つゝ書かれた勞作であつて、私自身きはめて啓發されたばかりでなく廣く學界を裨益し一段とその水準を高めるものであることを信じて疑はない。(一九四七・一〇・一〇)

本號執筆者紹介

- | | |
|-----------|-------------|
| 松 井 清 | 京都大學助教授 |
| 岩 根 達 雄 | 京都大學學院特別研究生 |
| 岸 本 英 太 郎 | 京都大學經濟學部講師 |
| 河 野 健 二 | 京都大學助教授 |